

特集 平成29年度 第27回
全国女性建築士
連絡協議会
東京大会報告

開催日…平成29年7月15日(土)、16日(日)

会場…リロ会議室田町(全国女性委員長(部会長)会議)
日本建築学会建築会館ホール(開会式・活動報告・被災地報告・基調講演)
建築会館会議室、読売理工医療専門学校(分科会)

テーマ

未来へつなぐ居住環境づくり
「和の空間を考える」



全体会



全国女性委員長(部会長)会議



被災地報告



全国大会京都大会PR

特集のことば

東京大会を終えて

小野全子 ■ (公社)日本建築士会連合会 女性委員長

平成29年度第27回全国女性建築士連絡協議会東京大会は、皆様のご協力により、盛況に開催することができました。暑い日が続く中、多くの皆様にお集まりいただきまして、誠に、ありがとうございます。

先日の九州北部の豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。昨年の4月に発生した熊本地震は、日を追うごとに被害の大きさが明らかになってまいりました。さらに昨年の10月には、鳥取県中部地震が発生しました。今年の被災地報告では、岩手県、宮城県、福島県、そして、熊本県、鳥取県の皆様に現状をご報告していただきました。実際に活動された内容を共有することで建築士としてこれから何ができるか、支援のあり方も含め、考えていきたいと思っております。

今回のテーマは「未来をつなぐ居住環境づくり」、サブテーマとして「和の空間を考える」といたしました。

近年、和室を持つ住まいが少なくなり、設計に和室を取り入れる機会が減ってきました。住まいの中から失われつつある和の空間を皆さんと一緒に考えるとともに、和の空間や和の要素を改めて捉え直し、これからの居住環境づくりに活かしていきたいと考えました。

そこで、今回は、基調講演に博物館明治村館長であり、早稲田大学の名誉教授であります中川武先生をお招きし、和の空間を考えるというテーマでお話いただきました。ご著書『日本の家』の中の「日本の伝統住宅には、場、部位、しつらい、境界、素材、などにまつわる多様な用語や言葉があったが、住宅様式の近代化の過程で、失われつつある。しかし、それらに対する懐かしさと喪失感の中こそ、住宅にとって大切なもの考えるヒントがあるのではないか」といった記述に共感し、ご講演をお願いした次第です。

そして、各建築士会の活発な活動の中から、今回は、北海道建築士会から高校での住教育講座への取り組みについて、宮崎県建築士会から「ノベオカノマドハウス」リノベーションプロジェクトについてご報告していただきました。

2日目の分科会では、8つのテーマ、「防災への取り組み」「地産池消のすまい」「歴史的建造物と建物再生」「環境共生住宅」「自治体連携とまちづくり」「子ども住環境」「高齢社会と住まい」「既存ストックの活用」など、さまざまな課題についてご報告いただき、意見交換を行っていただきました。

私たち建築士に何ができるかを、ともに考え、ここでの情報交換により皆様のこれからの活動の糧としていただければ幸いです。

平成29年度 第27回 全国女性建築士連絡協議会アピール

1. 私たちは、今回の協議会を通し、女性建築士としての感性を活かし、暮らしやまちづくりにおいて子供たちや高齢者にやさしい「居住環境づくり」を目指します。
2. 私たちは、今回の基調講演を通して、日本の住まいの中から失われつつある和の空間を再認識し、次世代へ和の豊かさを伝えていくことに取り組んでまいります。
3. 私たちは、震災報告等の情報発信を通し、女性建築士として、防災と復興支援のあり方を考え、これからの暮らしを守ります。
4. 私たち女性建築士は、様々な分野の専門家との連携を深め、誰もが暮らしやすい社会の実現のため、職能を活かした提案を行なってまいります。



小野全子連合会女性委員長



開会式での三井所清典連合会会長による主催挨拶

開会式

主催挨拶

「和の空間を考える」 継続活動に期待

三井所清典

■ (公社)日本建築士会連合会
会長



全国からお集まりの女性建築士の皆さんの、晴れやかなお顔を拝見して喜ばしく思っております。去年の奈良大会での畳の話が印象に残り、引き続いて和の空間を追求していくという姿勢は大変ありがたく思っています。

日本に造家学科ができて、明治12年に4人の卒業生が出てからそれ以降、堂々たる構えの西洋建築をつくっていくということが設計をするものの役割となり、和の空間を考えるというようなことは少なくなってきました。

今、京都の町家にしても、徳島の祖谷溪の民家にしても欧米人のあこがれです。日本の現代生活を支えてくれて、なおかつ和のテイストが十分にある空間が実現できたら、これは世界に誇れる日本の住まい、建築になっていくのではないのでしょうか。そういう意味で、継続して和の空間に取り組んでいらっしゃる女性委員会に敬意を表したいと思います。

東京ミッドタウンや三越界隈の建物は雰囲気がとても日本的につくられています。素材やデザインにも活かされているところを見ていただくと、和の空間を考えるということがいかに時代に合っているかということがわかります。配布した『和の住まいのすすめ』の裏表紙を見ますと、6つの省庁が一緒になってつくっています。こういうところが連携しながら、一緒になって進まなくてはいけないということがわかるような本です。

建築系の大学や高等学校の教育でも和に触れることが少なくなった今日、実務を通して社会に示していくのが建築士会の役割であり、後輩の建築士のよいお手本になるような活動を、ぜひ続けていかれるとよいと思います。

和の住まい、和の空間を継続して進められることを期待して、ご挨拶とさせていただきます。

委員会担当副会長挨拶

女性建築士の 活躍の場を

岡本森廣

■ (公社)日本建築士会連合会
女性委員会担当副会長



今日は、非常に多忙な中、そして暑期中、日本全国から集まっていたいただき、本当にありがとうございます。加えて日本建築士会連合会のさまざまな事業、活動に対しまして、47都道府県建築士会の皆様の深いご理解、ご支援をいただいておりますことに御礼申し上げます。これだけ各地域の女性建築士が一堂に集まるのは当会しかないと思います。

女性が活躍する法制度ができ、働き方改革など、女性の背中を押すさまざまな施策ができてきたことに加えて、市民社会の意識も変わってきたと思います。建築士会も社会貢献のために頑張っているわけですが、ここに来られた方々が多くの友人を得て、自分を磨いた後に期待するのは、地元に戻られて、ここで得たものを実際にかたちにしていただきたいということです。中でも一番力を入れていただきたいのが、社会で女性建築士が見える活動をしていただきたい。そのことが皆さん方をもっとブラッシュアップできるのではないかと思います。

47都道府県建築士会の女性委員長(部会長)会議の中で、会員を集めるのにいろいろな苦労をしてこられたというお話がありました。次の世代の方々を自ら発掘して、しかるべき立場に立つ機会を与えていただきながらしっかり育てていただいて、課題解決型の建築士会と言われるようになっていただきたいと思っております。

近年は、社会でどう活躍するか、どう貢献するかという話題、視点が増えてきたように思います。今日、明日の課題が自分のものとなって、そして、もっと女性を活躍する場所に押し出していけるような機運が生まれることを期待して、挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

建築の世界での 女性の活躍を願って

村松泰子

■ (公財)日本女性学習財団
理事長



第27回全国女性建築士連絡協議会の開催、おめでとうございます。私どもの財団は、あらゆる領域での男女共同参画の推進を目標に、全国を対象に女性のエンパワーメントに向けての生涯学習のためのもろもろの事業を行っております。レポートを募集したり、ブックトーク等ですが、もう一つ財団の事業の柱として月刊『We learn』、男女共同参画のための情報誌を刊行しております。手に取りやすいものですけれども、中身は濃いと思っております。

この冊子の巻末のほうに、この数年「Women's Art」という連載で、これまで絵画、音楽、絵本を取り上げてきましたが、昨年度は建築を取り上げました。ご執筆は本協議会の初代女性委員長であった村上美奈子さんにお願いしまして「ひと・すまい・まち」と題し、1年間連載していただきました。第1回の「建築界をジェンダーの視点で見ると」というところから始まり、住まいづくり、まちづくりに女性が参画することの意義をあらためて学ばせていただいた次第でございます。

打ち合わせの中でお聞きして印象に残っているのが、今、全国の女性センター、男女共同参画センターに交流のためのオープンスペースがありますが、それは女性が集まるためにはオープンスペースは必須のもの、有効なのだということを主張していただいた結果だというお話です。

私どもの財団は、基本的にはあらゆる分野での男女共同参画社会が実現していくことを願っておりますので、建築の世界でも女性がますます活躍してくださること、そしてそのために、今日、明日のこの協議会が、皆さまにとって実り多いものになることを願ひまして、私のご挨拶とさせていただきます。

基調講演

和の空間を考える 居住空間にとって美とは何か



講師

中川 武 ■ 博物館明治村 館長、早稲田大学 名誉教授、建築史家

懐かしさの秘密

「和の空間を考える」というテーマに、「居住空間にとって美とは何か」という副題をつけてお話しします。この問題には、和の空間の歴史や構造を捉えることが必要です。美とは、見た目もちろんありますが、対象との距離だと思うのです。その距離をどう取っていくのかが非常に重要です。

私の著書『日本の家』[文献1]では、住まい方、住まいの空間において「懐かしくも失われていくもの」と「変容しつつ積層されてきたもの」の意義について、境界空間、仕切り、場、しつらい、素材、象徴に分類される具体的事例をあげて説明しています。その懐かしさの秘密をきちんと持っていることが、住空間にとって重要です。それはある種のロマンチズム。現代のリアリズムは、非常に世知辛く、強い力を持っている。それを崩していくのは、相当強いロマンチズムじゃないとできないと思うのです。

いま、被災地の問題はすごく深刻です。人

間が自然から離れたことによる災害ではないかと思います。自然に対して使っていた科学技術が、人工知能のように人間を対象にするようになって、人間と自然との関係は根本的に変わりつつあります。にもかかわらず、災害で人間が亡くなっていく。人間は自然から逃がられない。建築は自然を相手にしつつ、自然から離れていく。建築の設計には見た目や理屈だけでなく、思いや情感が必要です。

マルクスの中で「個は個として生き、個として死ぬべきである。しこうして類は永続する」という言葉があります。人は個として死んでいくけれど、人類の歴史はつながっていく。ここに人間の可能性もあります。個と類あるいは普遍性との間に架橋ができるのです。和の空間を考え、後世に伝えることで、私たちは何か意味あることに触れる、それが美だと思います。

日本建築の生産史的展開

私は日本建築生産史と設計技術史が専門で、大工の「木割」を研究してきました。日本建築

生産史とは、日本の建築が歴史的にどのような可能性をめざしてきたかを考えることで、住空間もそれ抜きに考えられません。古代的な建築生産のカーブが8世紀頃に中国から律令制の影響を受けてピークになると、それを支えていた基盤が崩壊して下降していく。その古代的な建築生産の仕組みを底辺にしながら、今度は新しく中世的な建築生産の仕組みが萌芽的に出てくる。建築の様式や表現は、その生産史の上部につくられます。

建築生産を下限として、そこからどこまで離れていけるかが表現や設計あるいは文化です。近代は建築生産の水準に対して、表現の自由が大きく伸びます。しかし、生産的な合理性が下限を必ず規定する。一番の上端と下限が、その時代の様式の幅、表現空間の幅です。自然から離れた人間がどこまで、表現領域を広げるのか。表現とは、人間が自然であることの中で格闘しながら生み出すことです。

古代の法隆寺と竪穴住居は、建築の技術、

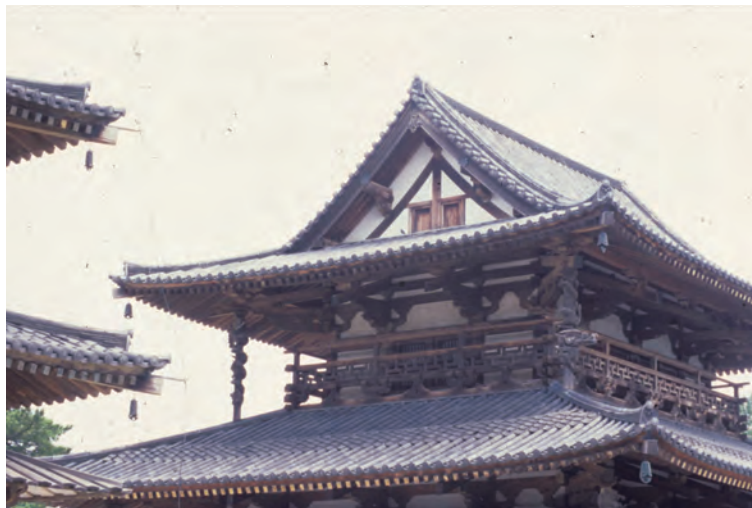


写真1 法隆寺金堂



写真2 浄土寺浄土堂

表現、質に大きな差があります。それが近世の江戸時代の中期から後期になると、最先端の上流の建築と普通の庶民の建築が同質的なものになる。たとえば、二条城と上流の民家は建築の技術、表現の質として、どちらが上とは言えない。これは歴史のある到達点と考えられます。

全体性の建築

佐味田宝塚古墳から出土した家屋文鏡には、建物とともに蓋・鶏・雷・樹木など紋様が描かれています。これは古代王権の祭祀の儀定書で、王権がどうやって成立するかを示すといえます。建築の形式が観念的な意味を担うのです。4世紀ごろ、堅穴住居が人体でなくて物差しで計測して設計されるようになり、ものと観念の両方で建築が成立するようになりました。地域連合国家という共同体となって建築が成立する。建築生産や設計技術の上で重要です。

法隆寺[写真1]には何度も行くべきです。昔、法隆寺は建築のホームラン王だと書いたことがあります。ホームランを打つと時間が止まる。みんなが拍手して一気に球場が一つの全体性を持つ。時間が止まる、あるいは視覚を遮断すると、全体性が生まれます。法隆寺で雲肘木がつくられたのは、背景の生駒山の雲にこの建物が呼応し合うためといえます。個々の細部は素朴な技術によるものなのに、その集積が一つの世界をつくりだす。法隆寺が一番よいのは夕方。世界が生まれ、時間が止まる。これが全体性の建築です。ヨーロッパの古典建築、ギリシャにも若干ありますが、やはり、ピラミッドとアンコールワットは建築のホームラン王。全体性の建築は世界史と時間に関係します。個の人間は生誕から死に至ってなくなる。でも、共同体の中では、死んでからも記憶が残る。それが全体性です。生誕から死に至るプロセスは時間の構造でもあり、都市や建築を考える上で非常に重要です。

野小屋と化粧、軸組みと造作

日本の住空間を考えるには、野小屋と化粧を考える必要があります。野小屋とは屋根裏のこと。古代には野小屋はなくガランドウでした。平安期にだんだん野小屋が発生し、構造を化粧で隠して二重になり、水平的に展開する空間が日本建築の基本になっていきます。

鎌倉時代に重源のつくった中世新様式(大

仏様)の浄土寺浄土堂では、もう一度建築を架構にしました。螺旋状に上昇していくような架構に西日が差して、極楽浄土に救済されるのです[写真2]。

日蓮や法然たちが一生懸命、民衆の救済をしようとしました。それまでの常識では、貴族は救済されても民衆はされなかった。絶対に無理なことをやろうとしたのが、鎌倉新仏教です。重源は建築で思想を語ろうとし、「南無阿弥陀仏作善集」で自分がつくってきた道や橋や建物を記録しました。彼にとっては、建物をつくるのが思想で、民衆の救済でした。

浄土堂の明快でダイナミックな架構は、本当は繊細に構成されています。中世には非常に精度の高い細工ができるのですが、それを表に出さず、構成的なものだけを出す。架構がそのまま空間であり、目的であるような建築が日本で初めてできたのです。

さらに、軸組みと造作という木造のシステムがあります。寺院も書院も数寄屋も民家も町家も全部同じシステムで統一できるようになって、木造技術はものすごく発達する。

格子の源流は密教です。平安時代に空海が導入した密教では、灌頂の儀式がすごく重要。先行儀式と本儀式の二つですが、対なので連携を持たせる。最初は幕を張りましたが、だんだん建築的に構成されるようになり、中世本堂では格子で結界をつくって、遮断しながら連結するようになったのです。

格子が住宅に取り入れられ、空気、明かり、生活感が外ににじみ出てきます。通りのにぎわいが家の中にも入ってくる。目が細かくて、丹精込めて掃除しなければいけない。格子は日本の住まいの境界的空間をつくる装置。作法と空間的な形式やデザインが一体化します。

重層的な非決定

叡山の江川家の土間では、縄文的な骨太の架構の中に、人馬のひづめの音がするような土間の三和土が広がります[写真3]。長く使い込んだ三和土の質感の秘密は苦塩にあります。苦塩は、塩をつくる時にできる凝固剤。日本ではなぜ、土俵で塩をまいたり盛り塩をするのか。それは聖なるものへの願いで、住空間の中の機能的、素材的な意味に、振る舞いや願いを重ねながらつくられます。日本では道具が多様な意味をもち、箸はスプーン、フォーク、ナイフ、全部の役割をします。そう

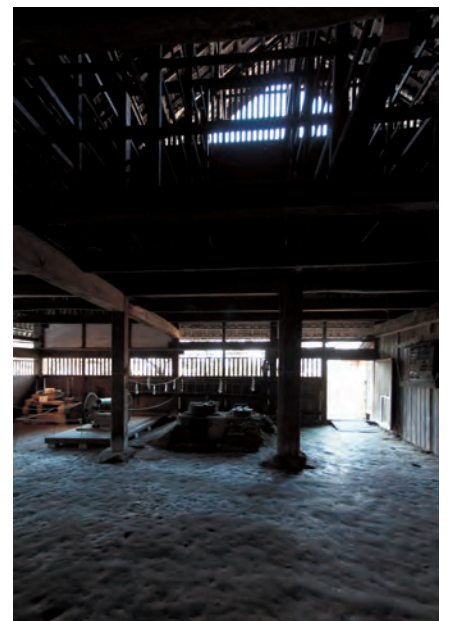


写真3 江川家

たとえば韓国にも似たような豊かなものがたくさんありますが、その違いもわかってきます。

和の住空間の中で変質しながら蓄積したのは、多重につながって層を成す。これが和の空間を考えるときに最も重要な特徴で、しかも現代性を持っています。多層なものが重なり合って、どれが本質とはいえない。それは使い手や場面によって変容していきます。和の空間は重層的であるけれど非決定で、たとえば機能によって全部統合できないものです。

大仏様、禅宗様、和様を全部統合しながら、よいところを取って斬新に折衷していく折衷様。加古川にある鶴林寺の本堂は、折衷様の中では一番よい建物だと思います。

桂離宮古書院は、飛石、石段、上がり框、鴨居、軒先など、直線で構成される中で、屋根が軒まで緩やかにふっくらとカーブして、直線と曲線の構成が素晴らしい。御輿寄の沓脱石は一見普通ですが、上面の中央が一寸ほど高くなる緩やかな丸みがついていて、屋根の曲線と呼応します。雨がたまらないという配慮です。直線と曲線の構成は、重層的な非決定を表します。主たる決まりがないことを全体として受け入れるということです。

浮上感

三仏寺の投入堂と龍岩寺の奥院は、非常に立地が特殊で、変化にとんだ構成をそのまま見せた懸造の建築です[写真4]。投入堂は、もとは一軒の流造で、それに小庇や縁や方杖などいろいろ継ぎ足して、見た目の流動感や浮



写真4 三仏寺投入堂

上感をつくりだしました。太い柱をなるべく細く見せるために八角形に近い大面を取り、方杖を乱雑に入れることで、浮上するように見えます。

平等院鳳凰堂も浮上する建築です。平安貴族は信仰する阿弥陀さんと自分の小指をつないで私を極楽浄土へ連れて行ってくださいと願った。その願いを建築でどう実現できるか。それは重力を基準とした美学から、浮き上る美学に切り換えられるかどうかでした。奈良時代の薬師寺東塔も、身舎と裳階がリズムカルな上昇感をつくりだしています。

外の自然を内部に導く

寝殿造風の上賀茂神社の境内[写真5]は、水が流れて、白州、高床があって、中には何も無い。外と内が透明に交流し合っている。静か



写真5 上賀茂神社

な明るさのためには水や風の音が必要です。

東求堂の同仁斎[写真6]は、書院造の木割の秩序感を持ちながら、明障子を開けると外とつながります。東山の裾野に寄り添うような東求堂は、東山時代の美の理想を示しています。

園城寺の光浄院客殿は、中世の主殿造の典型です。一間の柱間の半間の開口部から広縁、落縁、庭とつながり、内部が外の自然と一体化する。広縁と建具を通過した光が室内の白壁に反射して陰影感を出す。広縁という境界があることで、自然がより内部に導かれる。半間の開口部から部分的にトリミングして見る景色を頭の中で連想すると、古代の寝殿造の広大な外部に匹敵する庭になります。古代、中世、近世と考えていくと、初めて和の空間が何かということがわかってきます。

大徳寺大仙院本堂でも、建具の開口部と縁、透渡廊の開口部が部分的な情景を切り取り、情景を抽象化します。部分的な情景から全体の庭が連想されます。

大徳寺孤篷庵の忘筮は書院茶室です[写真7]。中敷居を入れてその上部に障子を入れることで、庭の風景を切り取り、露地のように見せています。壁でなく障子にすることで、室内外の明度の対比をやわらげています。その意味が活かされているのが雪見障子です。

桂離宮古書院では、奥のほうで座ったとき、立ったとき、縁に出たとき、当然、見える景色が違ってきます。日本庭園は寝殿造に源流があって、山に水が降り、それが谷川を流れ、水田に行き、大海に流れるという水の一生を構成しています。この座敷での立ち振る舞いによって景色の見え方が変わり、自分の作法によって空間が構成されます。自然にそうなることが、内と外の関係として非常に重要です。



写真6 東求堂同仁斎



写真7 大徳寺孤篷庵忘筮

借景も大事です。景色が見えるだけではなく、入ったときに外部に自然に気持ちがいくとすると内部に流動感が生まれ、広々と感じられます。意識が変わることが重要です。

両義性と融合

木造建築は軸組みと造作というシステムでできていますが、西本願寺の対面所と白書院での軸組は高い完成度で、中の空間を自由に構成しています。広縁、落縁、白州とつながり南能舞台があります。黒書院は数寄屋風書院で素晴らしい。北能舞台は日本最古の能舞台で中世の空間です。50年くらい後にできた南能舞台は近世、江戸時代の空間。能舞台の表現空間は来世。そこと現世をつなぐ境界が橋懸りです。この橋懸りの角度が重要です。北は27.5度で急、南は20度で緩い。江戸時代になると、能舞台の橋懸りはだんだん緩くなって、最後には平行になって歌舞伎劇場になります。中世は45度、近世は平行、古代は真後ろ。真後ろから出てくると、正面からは演能空間が時間の変化としてしか見えません。近世は真横に出てくる。現実と表現空間がつながり、視覚や空間的な差異でしか認識できない。45度はその両方です。時間的にも空間的にも差があります。北能舞台の27.5度は中世の45度を象徴しています。中世は、ある意味曖昧で、部分と全体、内外といった両義性があります。古代や近世はどちらかになる。古代は全部が一つの全体、近世



写真8 吉島家

の書院造の内部空間は閉じています。

茶室も非常に重要です。殿中の茶や大名茶は、茶立所でつくった茶を時間を経て飲みます。わび茶は一つの空間でそれを実現しようとしてきました。連歌や禅などの影響です。

最初は点前座と客座が別々で、道安囲いという間仕切りまであるのですが、天井は連続して別々の空間を融合しようとしています。中柱が立つ台目構えでは、床前空間、勝手、座敷という三つの異質な空間を一つに融合する。それを象徴するのが中柱です。待庵にはそういう区別がありません。待庵に入ると、ここに何かがあると誰でも感じます。そういう異質なものを抽象化しながら融合することで、源流の空間の持つ意味がそこに沸き立ってくるからだと思います。茶室空間はこのように論理的にできているのに、待庵が一番古いことが謎です。

時間と空間の射程

吉村家、喜多家の空間構成、構造、平面構成と空間の流れは、質実さとさりげなさと流動感を持っています。江川家の土間は時間の深度が本当に深い。17世紀くらいのものですが、その中には中世、あるいは古代の堅穴住居や縄文の洞窟の雰囲気を持っています。吉島

家[写真8]、明治時代のもはちょっとやり放題です。でも、自由だからできるわけでもありません。喜多家のように制限のある中で研ぎ澄ました自由な感じが生まれます。堀内家は庄屋クラスの家です[写真9]。これらの民家は本当に素晴らしい。このクラスがいっぱいあるわけで、近世の日本建築はここまで、法隆寺と堅穴住居にあった格差がなくなりました。こ

れには生産組織、技術、設計力、それを支えるインフラ、流通、生活の仕方などが含まれます。

近代を見ると、堀口捨己の岡田邸では、近代と伝統との融合性をテーマにしています。丹下健三自邸は日本の住まいを普遍的にとらえた、住宅史上重要な作品です。村野藤吾の佳水園は数寄屋建築で、夜に見るとよいです。石山修の幻庵の中は素晴らしい。

時間と空間。江川家のような時間的な深度を持っていること。吉村家や堀内家のような高い水準の空間。空間的な射程と時間的な射程をなるべく広げて欲しいです。もう一つ大事なのは、主体の構え、覚悟や志です。権力や資本など何者にもとられずに丹精を込める不羈の構えが必要です。でも、それだけでは駄目で、なるべく射程を広く、深度ある時間と空間の広がりや、自在に使いこなせるようになっていただきたいと思います。

文献1 中川 武『日本の家』(TOTO出版(2002)、角川ソフィア文庫(2015))

写真…講師提供



写真9 堀内家

活動報告

活動報告1 北海道建築士会

高校住教育講座「はじめての一人暮らし」

工藤美智子 ■北海道建築士会 女性委員長、工藤建築設計室 主宰

高校出張講座開催のきっかけ

北海道建築士会女性委員会では、1999年からの継続活動「子どもと建築」の成果を、冊子『女性建築士と考える 子どもをはぐむ住まいづくり』として2006年に発刊した。

この冊子をきっかけに2008～2012年度までの5年間、北海道高等学校家庭科研究協議会グループ別体験研修「住教育セミナー」を担当した。これまでの実績と、オリジナル教材活用事例、さらに全道各支部会員による地域に根ざした対応が可能だということから、北海道建設部より「地域における住教育実践推進業務」事業を受託した。

業務内容は3つで、

- ①家庭科の通常授業時間割の中で、女性委員会作成のオリジナル教材（講義+実習）を使い、士会会員が講師として指導する生徒向け出張講座を開催する。
- ②講座内容を授業に取り入れられるよう教諭向けセミナーを開催する。
- ③開催校への派遣講師を養成するため建築士向けセミナーを開催する。

というものだ。単年度委託業務だが、2008年度の開始から今年で5年目になり、2016年末で延べ34校、約1,700名の生徒が受講した。

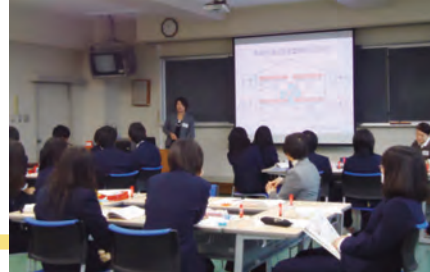
講座の目的とねらい

生徒には、講座を通して自分自身のことを知り、住まいに関する興味・関心を高め、自分らしい暮らしについて考えるきっかけになってほしいと考えている。また、教諭には、調理実習のような授業が住居分野でも可能だということを知っていただくことで年間カリキュラムの住居分野授業が1時間でも多くなるのではないかと期待している。

講座の内容

テーマは、「私らしい住まいの設計——はじめての一人暮らし」。まず、住まいを考える上で大切なことを座学で伝え、次に間取り制作実習、最後に制作図をスクリーンに投影し想像した内容を発表するという流れだ。

家族向けの住まいでは現在の子どもの立場からの発想になってしまうと思い、あえて一



前半の講義風景

人暮らしの空間としている。間もなく親元から独立する年齢（16～18歳）の生徒が対象なので、近い将来の自分を想像することで、すべて自分が責任を持つ空間（住戸）という視点に立って考えることが可能となる。

実習は個人作業だが、生徒6～8名+講師1名でグループとなり、楽しく会話しながらさまざまな考えがあることを知り、自分らしい暮らしについて考えを深めてもらう。

学校教育へのかかわり方について

全道の高校へ依頼したアンケートでは、82%の教諭から「よい教材が欲しい」と回答があった。現在多くの教材が出版されているが、現場の要求と合っていない、または使いこなされていないと推測する。時には専門家が授業の補助に入る必要性も感じている。

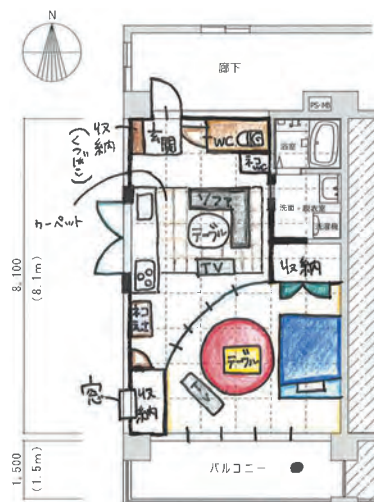
全道各地で出張講座の認知度が上がってきた。次は、地域密着で継続的な協力体制づくりに努めたいと考えている。



冊子「子どもをはぐむ住まいづくり」



実習風景



生徒作品



きらら延岡のメンバー

活動報告2 宮崎県建築士会

「ノベオカノマドハウス」リノベーションプロジェクト

遠藤啓美 ■ 宮崎県建築士会延岡支部 女性委員会

延岡の駅まち(中心市街地)の現状

全国の地方都市と同様に延岡市も中心市街地が空洞化、商店街から人が途絶えシャッター通り化しています。客足を取り戻すために延岡市は駅とその周辺における「延岡駅周辺整備プロジェクト」を進めていきました。

整備の核となるのは駅前複合施設の建設ですが、それは商業施設ではなく「市民活動の拠点となるコミュニティ施設」をつくることです。その仕掛けづくりをするために、2010年に延岡市はコミュニティデザイナーの山崎亮さん率いるStudio_Lに相談、また2011年に駅周辺整備のデザイン監修者として建築家の乾久美子さんを選定し、市民ワークショップを計5回、市民を巻き込む形で展開しました。

その後、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社(CCC)が指定管理者に選定され、「延岡駅周辺整備プロジェクト」は「市民活

動」をキーワードにして駅まちなぎわい再生をめざした取り組みを行っています。乾久美子さん設計の駅前複合施設は現在施工中。2018年3月に完成予定です。

「ノベオカノマドハウス」とは

多くの市民活動団体を支援する「NPO法人のべおか市民力市場」は、かつて駅まち商店街で一番賑わっていた通りにある空き店舗ビルの1階を借りて、市民の交流・活動の拠点となる「ノベオカノマドハウス」を設置しました。これは、「延岡の——窓」と「延岡——ノマド(遊牧民)」の2つの意味があり、駅まちで展開される「市民活動の総称」のことを言っています。

その空き店舗のリノベーションが、宮崎県建築士会延岡支部女性委員会(以下、きらら延岡)に一任されました。これまで私たちは10年以上、市民WSや駅まちでのイベント、社会実験への協力に力を注いできたので、プロジェクトの依頼は願ってもないことでした。

リノベーションプロジェクトの提案

限られた予算の中でどのように空き店舗をリノベーションするか。そこで私たちが提案した内容は二つ。一つ目は乾久美子さんが駅前複合施設で提唱した建築デザインコンセプト「建築を可視化させる」という考えを、ノベオカノマドハウスにも反映させるということ。施設内で活動する市民がまちの風景となり、まちに賑わいを生むという考えです。そしてもう一つの提案は「自分たちの居場所は自分たちでつくる!」ということです。それはできるだけ多くの市民に「延岡駅周辺整備プロジェクト」に関わってもらうことで、駅まちに愛着をもってもらうためです。

解体・大工・設備工事はプロに依頼し、その後キックオフセミナーに始まり、壁塗り、床

張り、棚づくり、照明シェードづくりなど、全7回にわたるDIYワークショップで「ノベオカノマドハウス」を完成させました。

ワークショップで大切にしたこと

私たちはワークショップで大切にすることがあります。まず「初めの自己紹介」で顔と名前、特技や趣味を知り、ともに作業をするんだという協働の気持ちを盛り上げます。それから「休憩」。駅まちで購入したお弁当やおやつをいただきながら参加者同士のコミュニケーションを広げます。駅まちの美味しいもので駅まちのことを知ることもこのワークショップの魅力の一つです。そして作業が終わったら「完成作品へのサイン入れと記念写真撮影」を行います。自分が駅まちでの活動に関わった証を残し、さらに駅まちに愛着を持ってもらうためです。

そしてもう一つ私たちが一番大切にすることが「愛ことば——いっちゃんがいっちゃん(延岡弁でいいんだよの意味)」です。細かいことは気にしない、少々うまくできなくてもこの言葉で失敗してもなんだか楽しく作業を進めることができました。

このようにして市民と一緒に作り上げたノベオカノマドハウスは、完成して1年が経過し、市民の交流と活動の場・みんなの居場所となつてにぎわっています。その後、私たちは延岡の建築士会で展開する「デザインで仕掛ける延岡駅まちプロジェクト」において駅まちでの活動を続けています。10年後、20年後に駅まちが賑わいで満たされていることをめざし、これからも、きらら延岡は駅まちに「賑わいの種」を蒔き続けます。



ノマドハウスのプレ・オープンにて。看板づくりワークショップ

被災地報告

被災地報告1 岩手県建築士会

「かまいし未来のまちプロジェクト」が完成予定

松山梨香子 ■ 岩手県建築士会釜石支部



ワークショップの様子

新たな復興戦略

岩手県の南東部に位置し、急峻な山々に囲まれた自然豊かな三陸漁場のあるリアス式海岸に面する釜石市。東日本大震災では、死者1,063名(行方不明者152名、関連死認定者105名含む)、家屋被害4,704戸(市内住宅全体の29%) (出典…市発行記録誌「携まづ屈せず」)の甚大な被害を受けた。

震災後、喫緊を要する膨大な復興プロジェクトに対し、時間、人材、経験などが極端に不足し、すべてを丁寧に計画することが非常に困難な状況下であった。しかし市では、みんなが戻りたくなる、訪れたいような、未来に向けた活力に満ちた復興を成し遂げるため、復興戦略上、建築の側面による視点から重要と位置付けられる拠点施設について、設計者を簡易公募型プロポーザル方式で選定する「かまいし未来のまちプロジェクト」(通称

「みらまち」)を2012年10月25日に立ち上げ、7つのプロジェクトを進めてきた。

プロジェクトの概要

プロポーザルの審査委員は、市の復興ディレクターを務める建築家の伊東豊雄氏、小野田泰明・東北大学大学院教授、遠藤新・工学院大学教授の3名を中心に、各プロジェクトに応じた専門家も含めて構成し、設計者を選定する。設計者はワークショップでの住民意見を取り入れながら設計をまとめ、計画内容を住民に丁寧に説明する役割も担う。また、「みらまち」は設計者選定のためだけのプロジェクトではなく、各プロジェクトの調査・構想段階から、プロポーザル審査、設計、施工、管理・運営の最終段階までを、市と復興ディレクターとともに、住民や専門家や事業者がお互いに支えあいながら、ともに目標へ向かう

ための枠組みが構築されていることも特徴である。

各プロジェクトの設計者が選定され、設計が進捗する最中、被災地の資材不足や人手不足に伴う市場単価の高騰から、先駆けて進めていた復興公営住宅の入札不調が相次ぎ、復興事業を確実に進捗するためには施工者の確保が喫緊の課題となり、新たな発注手法の検討と選択が必要となった。

復興公営住宅は買取事業に手法を切り替え、学校やホールはECI方式(基本設計を基に、優れた技術と施工実績に基づく経験を有する事業者と、施工方法や工期短縮の提案、施工品質を確保したうえでVE提案を受け、市と設計者と協同で協議を行いながら実施設計を進める方式)の導入に踏み切ったことで、施工者を確保し、プロジェクトの遂行が可能となった。

刻々と変わる被災地の状況

状況が刻々と変わるリスクの多い被災地では、プロジェクトを確実に遂行するための苦渋の決断やさまざまな手法の検討が必要で、「みらまち」では、外部の有識者や専門家の見識や助言をお借りしながら進めたところが大きく、その中心的存在である小野田教授には、当初から釜石に寄り添い続けていただき、丁寧に、各地から派遣された経験豊富な応援職員の方々のご尽力についても、この誌面をお借りし、改めてこのプロジェクトに携わっていただいた多くの方々に深く感謝いたします。

7つのプロジェクトは今年度ですべて完成予定となっており、ラグビーワールドカップ2019開催都市にも決定している釜石に、ぜひお立ち寄りください。

	プロジェクト名	設計者	概略	発注方式 (当初想定)	発注方式 (見直し後)
復興住宅	第0号 半島部復興公営住宅	2012.10.26 選定 上野伊・アーキエイド 特定設計共同企業体	被災した半島の14カ所の漁村集落部、計225戸(当初想定戸数)の復興公営住宅(非通戸建)の設計のほか、造成地の土地利用形態や形状を調査する業務も含まれるプロジェクトで、「浜のすまいを考える会」と題した地域住民ワークショップやヒアリングを繰り返して丁寧に計画を重ねた。	設計施工 分離発注	4地区は当初想定のとおり。*上記以外、建物提案型買取方式に移行
	第1号 東部地区天神町復興公営住宅・こども園	2012.11.21 選定 平田晃久建築設計事務所	敷地は、市の中心となる東部地区の高台の学校等跡地に整備。集会所を併設する40戸の復興公営住宅(当初想定戸数)、とそれに隣接することも別の設計。	設計施工 分離発注	3回の入札不調の後、*復興公営住宅は、建物提案型買取方式に移行⇒S造5F(52戸)、2016.5竣工*こども園は原設計を生かし、単独で分離発注⇒2015.4開業
	第2号 小白浜地区復興公営住宅・生涯学習センター	2013.1.23 選定 TeMaLiアーキテツク	敷地は、市の南に位置する唐丹地域の中心となる漁港で、みらまち第3号と続く小中一貫校を見据えて再整備される学校につながるメインストリートに位置する。避難者収容施設と店舗を併設する20戸の復興公営住宅(当初想定戸数)。	設計施工 分離発注	1回の入札不調の後、*建物提案型買取方式に移行⇒S造3F(27戸)、2015.9竣工*建造長屋(3戸)、2015.7竣工
	第5号 東部地区大町復興公営住宅	2013.11.25 選定 大和ハウス工業株式会社岩手支店+株式会社千葉学建築計画事務所	入札不調対策として、建物提案型買取事業に切替えプロポーザルを公示。利便性のよい東部地区には15団地430戸を計画予定で、将来の高齢化を見据えたコンパクトシティの戦略もある。限られた敷地のため高層化は避けられない。そのため、「釜石市復興公営住宅設計ガイドライン」で重要視する孤独死を防ぐ計画が鍵となるが、建築家と事業者のJVにより、市街地らしいリビングアクセスのしかりを試み、S造6F(44戸)、2016.4竣工。	建物提案型 買取方式	
	第3号 唐丹地区学校等	2013.6.12 選定 松久美子建築設計事務所・東京建設コンサルタントJV	被災した唐丹小学校、唐丹中学校、唐丹児童館の設計、小学校敷地の背面となる斜面地に整備し、同敷地内には仮設の学校や児童館が配置され、計画も施工も難易度が高い。職住居同棟、地域活動や地域防災の拠点を併せもつ機能が要求された。2017.4開校(7歳棟と児童館棟は工事中)。	設計施工 分離発注	*基本設計の見直し*ECI方式に移行
公共施設	第4号 鶴住居地区学校等	2013.6.12 選定 シーラカンスアンドアソシエイツ	被災した鶴住居小学校、鶴住居中学校、鶴住居児童館、鶴住居幼稚園。土木的知見も必要とされる難易度の高い敷地で、市内最大の甚大な被害を受けた地区であることから、復興のシンボルとなる強いメッセージを発信できることが要求された。2017.4開校。	設計施工 分離発注	*基本設計の見直し*ECI方式に移行
	第6号 市民ホール・情報交流センター	2014.2.14 選定 エーエーティー プラスコムゾマコト建築設計事務所	商業とにぎわいの整備を主軸とするフロントプロジェクト1のメイン事業で、被災した「釜石市民文化会館」の機能を代替する「市民ホール」の再建と、ホールに併設することで相乗効果を期待する「市民ホール」を併設した「情報交流センター」の計画。文化や芸術を通じてこの復興を後押しし、住民の活力を呼び戻す。2016.12情報交流センターオープン。2017.12ホールこけら落としの予定。	設計施工 分離発注	*発注者支援業務(発注方式の検討及びVE提案をホール設計経験のある第三者的立場で評価)を別途発注*ECI方式に移行

かまいし未来のまちプロジェクトの概略

被災地報告2 宮城県建築士会

東日本大震災以前から、そして以降、女性会員が参加している活動報告

佐藤美保子、星ひとみ、小林淑子 ■宮城県建築士会

女性部会として、支部の活動として、個人的な活動として、震災以前から行っている活動もありますが、震災以降、さまざまな思いのなかで始めた活動もあります。今回はそれらを報告いたします。

「記憶の中の住まい」プロジェクト

震災後に始まった活動。津波で流されたわが家を図面で再現します。間取りや暮らしの様子、家族や地域の思い出なども文書にまとめてお渡しします。

仙台市立中学校で耐震診断授業の講師

震災前から、支部の活動として行っていた活動。中学生(子ども)から家庭(親)へと防災意識を高め、木造住宅の耐震診断へと繋げる活動です。

田代島プロジェクト (離島の古民家再生に向けて)

震災後、所有者が解体の意向を示していた、明治14年の古民家を何とかできないかと「お掃除ボランティア」を開始。約3年近く経ち、所有者の理解を得ることができ、今年度は文化財登録に向けて女性部会の活動として行うことになりました。

クロスロードへの参加

クロスロード(阪神・淡路大震災で、災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成された、カードゲーム形式の防災教材)に参加している様々な意見を聞くことが「防災への備え」に繋がると思います。

市民センター主催の市民企画会議に参加

市民センターの「防災講座」への参加から市民が企画する会議への参加へ。市民や小学

生を対象とした「防災講座」を企画・開催しています。

海岸線の植林活動への参加

海岸線の植林活動では、県内外から多くの方に植林をしていただいています。植林活動するだけでなく、その苗木を育てるお手伝いや、植林後の海岸線のケアなどにも参加しています。

絵本の出版と読み聞かせ

震災を経験し、自然の豊かな恵みへの感謝、畏敬の念、自然や地域を知る事を子供たちに伝えたいと、自主出版しました。

よいことをしているのか、正しい方法なのか、わかりませんが、復興・防災・地域のことで、宮城の建築士が「できたこと」「やり続けていること」の一部を報告させていただきました。



耐震診断授業の講師(アシスタント)



(上)防災倉庫見学。(下)女性部会員発明の「耐震・制震・免震体操」は大好評



地域の防災訓練日にはブースを出展

被災地報告3 福島県建築士会

ふくしまの現状と 女性委員会の活動

ふくしまに生きる

酒井美代子 ■ 福島県建築士会女性委員長

今、福島県は復興へ向けてゆっくりながらも着実な歩みを続けています。そんな福島県は復興という「光」、原子力災害がもたらした「影」という言葉で表現できます。今回の、被災地報告では「ふくしまの現状」として6月4日に現地に行って取材した様子と「女性委員会の活動」を報告させていただきます。

ふくしまの現状

福島県では、今年の3月と4月に大きな出来事がありました。原子力災害に伴い避難指示されていた区域が解除になり、飯館村、川俣町、浪江町と富岡町の住民が帰れることになりました。避難者の数は、ピーク時に164,865人。昨年は、9万人を超えていましたが、今年の5月で60,179人になり、大きく減少したのがわかります。

復興公営住宅は、地震・津波被災者向けは96%が完成しました。原発避難者向けは今年度中に完成を予定しています。除染実施状況は98%まで進みました。放射線量は

福島県で平成23年4月の2.74マイクロシーベルトから0.17まで減っています。この0.17という数値は、海外ではソウルと同じくらいになります。郡山市は0.1、会津若松は0.05と低い値になっています。0.05という値は東京と同じくらいになります。Webサイト「新・全国の放射線情報一覧」では各都道府県の放射線量が公開されていますので、チェックしてみてくださいいかがでしょうか？

6月4日の現地取材では、放射線の線量を測る線量計を持ち現地に行きました。福島駅を出発し、3月に避難解除になった飯館村に行きました。工事中の「道の駅までい館」や建設中の家々が見える一方で、除染された土が入っている黒い袋(フレコンバック)が山積みになった光景が至る所に広がっていました。

私たちは、さらに国道6号線を南下し、浪江町では駅と閑散としている駅前商店街、仮設商店街「まち・なみ・まるしえ」を見学し、双葉町では帰還困難区域を通過し、富岡町では駅周辺の復興の様子を見て来ました。今年の4月の東北ブロック会女性委員長会議において、ぜひ、福島の実状を見てみたいという声があり、このルートを通り、9月2日(土)東北ブロック会女性委員会視察・見学会を開催することになりました。

女性委員会の活動

主な活動は「女性建築士のつどい」の開催です。7月8日(土)～9日(日)「歴建～故を訪ねて新しきを知る～猪苗代路」、昨年に引き続きテーマは「歴建」各地域の歴建を訪ねて学ぶつどいです。

今年は、福島県を代表する観光地、猪苗代町での開催です。中心市街地活性化施



(上)猪苗代ギャラリー。(下)はじまりの美術館

設「い～な郷の蔵」をメイン会場に行われました。8日の午前中は、東北ブロック会、全建女の報告、各支部の活動報告が行われました。午後からは、青年部の協力のもと、猪苗代のまちづくりについての経緯をお聞きし、街中を班ごとに歩きました。二度の災害にあいながらも見事に再生され2014年グッドデザイン賞を受賞した「猪苗代ギャラリー」でのカルテットのコンサート、そして見学。築120年の一八間蔵を改修した小さな美術館「はじまりの美術館」の見学。まちなかコミュニティ施設「如風庵」ではお茶とお菓子をいただきながら意見交換を行いました。夜の懇親会は裏磐梯レイクリゾートホテルに会場を移し、アトラクションのよさこいからはじまり、各支部対抗の余興ありと、楽しいひとときを過ごすことができました。

各支部の活動も、歴建のテーマに沿った活動をはじめ、各地域に貢献する活動を行っています。福島支部では、第10回例会特別企画「歴史的建造物見学研修交流会」が、飯坂温泉にある3階建ての「なかむらや旅館」にて開催されました。



(上)飯館村入口。(下)飯館村フレコンバック



なかむらや旅館

鳥取県中部地震状況報告

山下愛子、小谷卓也 ■ 鳥取県建築士会

被災の状況

2016年10月21日、M6.6、最大震度6弱の鳥取県中部地震が発生。短周期の振動だったため倒壊した建物は少なく、瓦のずれや墓石の倒壊が数多く見られた。建物被害は約15,600棟(ちなみに被害が多かった倉吉市・北栄町の全世帯数は約23,700世帯)。電気は数時間後、断水も一部の地域を除き当日中には復旧した。道路も通れないほどの亀裂はほぼなかったが、段差や不陸が目立った。その他農業、観光業等甚大な被害だった。幸いにもこの地震で亡くなった方はなく、早々に全国報道されることもなくなった。

「震度6弱は大したことない、6強ならまだしも」とよく言われる。立場が替わればそう思うかもしれない。東日本大震災や熊本地震とは比べものにならないくらいすぐ日常に戻ることができた人が多かったのは確かだ。しかし、災害があれば必ず被災地があり、被災者がいる。わかっていたようでわかっていなかっ

たこと、報道では見えていなかったことがたくさんあった。これはどこでも起こり得ることだと思った。

人手確保の難しさ

地震後すぐに地元の建築業界を襲ったのは、応急危険度判定や民間からの耐震相談、被害調査、公共施設の調査業務である。会社は散乱した物の片付けをした後すぐ業務再開できたが、通常業務を行いつつながらの調査や相談は非常に大変だった。特に、被災した公共施設の調査は、短い期間で調査・図面・写真・金額をまとめる必要があった。

また施工者は、屋根の上でブルーシートによる養生作業を行っているの見知らぬ家からも「うちお願いします」と依頼があり、断るわけにもいかず、外が暗くなるまで何件も対応した。数枚の瓦修繕にお金を請求することもできなかつたと聞く。

震災から8カ月経つが、未だ屋根のブルー



屋根瓦の被害が多かった

シートが目立つ。すぐに通常業務に戻ることができたため、受注済の業務の迫る納期を優先せざるを得ない面もあった。また、もともと慢性的な職人不足だった上、被害の大きい所は建て替えをすることになり、そちらに人手を取られ、修繕復旧工事が進んでいかないのも一因だと思う。6月の報道によると、被害家屋の85%は未改修。同じ県内でも被害が少なかった地域とは温度差があり、なかなかこの状況は理解が得られなかった。

そんな中、災害対策本部におられた行政の方にお話を伺う機会があった。市民のために不眠不休の作業、と言葉ではよく聞くことだが、内容を詳しく伺うと想像を絶するものだった。避難所は自分たちが運営するという基本の周知等、市民の防災意識の向上が急務だとおっしゃっていた。

体験を通して実感したこと

今回お話を伺って、連携し協力し合うことの大切さを実感した。それぞれの立場でできること、それぞれを知ること、共助の大切さ。防災は「一人の百歩より、百人の一步」が大切だと。建築士会として10年以上前から防災活動を行ってきたが、地震後、さらに防災ワークショップの依頼が次々とくるようになった。皆の防災意識は上がり始めている。

自分の地域が被災地となったとき、大勢の方からの温かい電話やメールなどをたくさんいただき、どれだけありがたかったことか。応急危険度判定も全国からたくさん来て下さった。それぞれの人と人とのつながりが、点と点がつながって線になるように、それが広がっていくように。災害に強い街づくり、人づくり、明日へつなげたい。この想いを胸に、これからも防災活動を続けていきたいと思う。

最後に、中部地震の際ご心配くださった全国の皆様。救援物資を送っていただいた皆様。ご支援、本当にありがとうございました。



ブルーシートに覆われた街の様子

被災地報告5 熊本県建築士会

住宅相談会と小さな村での住宅復興の実践

持田美沙子 ■ 熊本県建築士会女性部会

2016年4月14日の熊本地震から1年が経過し、女性部会としての活動および私が携わった小さな村の取り組みを通して、住宅の復興に関するご報告を行いたい。

住宅相談会を軸として

応急危険度判定に始まり、建物(公共施設、文化財、住宅等)の被害状況確認に迫られる中、県外からの支援に助けられる日々であった。たとえば、福岡の女性建築士。熊本市の住宅地で被災直後から被災者に寄り添い、危険度の判定、罹災に関する相談、地域づくりの提案。また、東北の女性建築士の声かけで始まった益城町の住宅団地での地盤・擁壁の相談会。ここでは地盤工学会、地質調査業協会を巻き込み、8月に「不動沈下家屋の修復」の勉強会を住民向けに開催。そして、九州ブロックでは6月の集い大会後に特別委員会を設置。西原村を中心に支援がスタートし、熊本のみならずさまざまな被災地支援を行っている。3月には御船町にてユイファ・ジャパン主催の住まいの勉強会+相談

会開催。これらの活動を一緒になって取り組んできた。

1年が経過し、被災地支援の格差を感じている。被害が大きいとされている益城町、西原村はメディアにも取り上げられ、また、仮設団地にはさまざまな支援がある。私たちは支援が行き届いていない被災者の方に対する相談会を実施し、同時に、被災後復興記録について、「建築士・女性・生活者」の視点でまとめる作業を始めた。

小さな村の取り組みを通して

五木村は地震直後、五木産材でつくった組み立て式のベッド20台を避難所に提供。また、地震による木造住宅離れを懸念し、いち早く「今後の木造建築のあり方を探る。」シンポジウムを被災直後の7月に開催。基調講演では三井所会長、山辺豊彦氏にご登壇いただいた。

五木村の「森林で自立する村づくり」宣言を支援する設計者、施工者等は、復興支援チームを結成し、古民家が数多く残る集落で

第三回 五木産材普及啓発シンポジウム 2016年 7月16日(土)



高橋 直希 TAKAHASHI NAOKI	山田 和生 YAMADA KAZUO	山本 健二 YAMAMOTO KENJI	山田 和生 YAMADA KAZUO	持田 美沙子 MOTIDA MISAKO

PROGRAM		
1) 開会 13:30 (13:00開場)	基調講演 13:45-	パネルディスカッション 14:40-
2) 主催者挨拶 五木村長	三井所博典 氏 13:45-14:10 「今後の木造建築のあり方を探る。」	三井所博典 氏 (三井物産株式会社代表取締役)
3) 主催者挨拶	「熊本の木造建築を守るために、これからの木造建築」	山田 和生 氏 (熊本県立大学建築学部長)
4) 基調講演	山田 和生 氏 14:10-14:40 「今後の木造建築のあり方を探る。」	山田 和生 氏 (熊本県立大学建築学部長)
5) パネルディスカッション	山田 和生 氏 14:40-15:10 「今後の木造建築のあり方を探る。」	山田 和生 氏 (熊本県立大学建築学部長)
6) 閉会 16:10		山田 和生 氏 (熊本県立大学建築学部長)

「今後の木造建築のあり方を探る。」シンポジウムチラシ

相談会を開催。古民家を解体から救った。また、「くまもと型復興住宅」に賛同し、地域の木材を活用し、グループのメンバーによる復興住宅の建築が進んでいる。

住宅の復興は、建物のみではなく、地域の復興までも考える必要がある。地域の継続があつての復興であり、そのためには地元の設計者、施工者、木材供給者、流通者等が連携し取り組みねば地域を守ることができない。公費解体により地域の景観は変わりつつあるが、小さな村の実践から学ぶことは多い。



「今後の木造建築のあり方を探る。」シンポジウム風景

第1回 甲佐町津志田地区建物復興勉強会
震災復興セミナー
 18:00~19:40
 「震災後の建物対応をもう一度考え直す」
 ～地域コミュニティ、景観、そして大規模な私たちが残らざるべきか～
 一歩ずつ、先を向く。その一歩を踏み出すには、地域のつながり、そして大規模な私たちが残らざるべきか～
 一歩ずつ、先を向く。その一歩を踏み出すには、地域のつながり、そして大規模な私たちが残らざるべきか～
 一歩ずつ、先を向く。その一歩を踏み出すには、地域のつながり、そして大規模な私たちが残らざるべきか～
 講師: 高谷川 隆一
 熊本県建築士会 副会長
 熊本県建設士会 会長
 「質疑応答」
 19:40~20:00
 進行: 松下 敏
 熊本県建築士会 副会長
 熊本県建設士会 会長
 熊本県建設士会 会長
7月5日 18:00~20:00
 会場: 津志田公民館 熊本県上益城郡甲佐町津志田
 申し込み
 096-202-4156
 096-202-4055
 096-7475-8015
 http://www.kenchikushi.com/natsukashi



甲佐町での復興セミナーチラシ

甲佐町でのワークショップ



「不同沈下家屋の修復」勉強会

被災地報告6 九州ブロック

記憶の中の住まいプロジェクト

熊本地震における九州ブロック青年女性協議会の取り組み

満原早苗 ■ 佐賀県建築士会

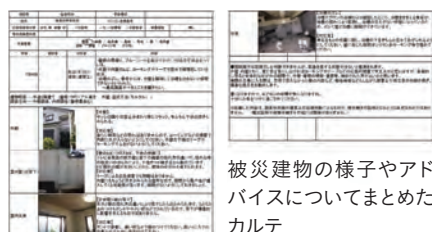
「熊本大分復興支援委員会」の設置

熊本地震から2カ月を過ぎた6月下旬、被災地でボランティア活動をしていた知人から、「被災建物への不安相談に乗ってほしい」との依頼を受けた。初めて訪れた被災後の西原村の状況を見て、私一人の力では足りないこと、制度的支援では手の届かない小さな支援が必要だということを感じ、建築士会の仲間への声掛けを行った。同様の相談が益城町の被災者より熊本士会の持田氏へも寄せられていたことから、建築士会のネットワークを活かした被災宅地・建物への相談活動が始まった。

活動の内容は、応急危険度判定コメントの翻訳、専門家を招いた地盤等の勉強会、被災建物の応急処置のアドバイス、仮設住宅での住環境改善アドバイス、などである。現地ボランティアの方との連携により、ニーズの



仮設住宅の段差軽減のための踏み段設置



被災建物の様子やアドバイスについてまとめたカルテ

把握や相談日時の調整、人員確保などをスムーズに行うことができた。

これらの活動を行うために「建築ボランティアネット」という任意団体を立ち上げた。活動状況は九州ブロック青年女性協議会の中でも情報共有し検討を行い、九州各県建築士会会長の承認を得て九州ブロック青年女性協議会の中に「熊本大分復興支援委員会」を設置。西原村小森仮設団地での協議会開催や、木工ワークショップの手伝い、建築ボランティアネットと連携しての相談活動などを士会の活動として不定期ではあるが継続的に行っている。

記憶の中の住まいプロジェクト@熊本

全建女大会の被災地報告で紹介された宮城県建築士会女性部会の活動「キオスマプロジェクト」をぜひ九州の被災地でもできないかと考え、宮城県建築士会の清本多恵子氏に相談。宮城県でつくられた資料等を提供いただき、取り組むことにした。

まず、西原村で解体を待つ2軒の住宅が対象となった。残したい想いが強くありながらも解体せざるを得ない被災建物を、所有者と一緒にいろいろな思い出を聞かせてもらいながら実測し、写真に納めていく。そして、その内容をもとに建物を図面化し、コメントとともに写真を整理して、1冊のフォトブック形式のアルバムにまとめた。

贈呈式の際には「建物がなくなってもこのアルバムがあれば頑張れます」「解体することに少しか踏ん切りが良かった」という感想をいただき、建物の誕生や再生に関わることが多い建築士として、建物の「最期」に向き合うというのはどういうことかを考える機会となった。



フォトブック贈呈式



調査をもとに作成した図面や写真をまとめたフォトブック

自然災害に向き合う際、私たち建築士はハードとして関わることの多い職種ではあるが、同じ職能を活かしたこの活動はやわらかく建築を通じたところの復興支援にもつながると信じ、今後も真摯に取り組んでいきたい。

分科会報告

A 分科会 参加者…21名

防災への取り組み

司会…土居純子(高知県建築士会)

アシスタント…清岡有喜子、
 入江恵子(高知県建築士会)

コメンテーター…野口美保(広島県建築士会)

広島県の女性部会は、防災をテーマにした活動(防災グッズの見直しや、「紙ぶるる」を利用した耐震啓発活動、DIGなどの災害連想ゲーム、被災地への見学)などを行ってきました。

これらの経験から、今後も防災をテーマにした企画継続のためにポイントを整理し、昨



「見つけて学ぶ☆たてももの防災探検隊」のチラシ

年新しくチャレンジされたのが「見つけて学ぶ☆たてももの防災探検隊」という企画です。

建物には、いざという時にみんなの安全を守る防災設備が、たくさん設置されています。どんな設備があるのか? 会場の建物を探検してみましょう。

①建築士の職能が活かせるか

私たちの日常業務である防災計画(平面計画・避難計画)は建築士の職能を活かせる領域です。階段や防火戸、スプリンクラーや放送設備、誘導灯などの設備がどのように設置され機能するか情報を提供することができます。

②参加者に身近な問題として感じてもらえるか

レクチャーのみにとどまらず、実際に建物を歩いて設備を見るという体験により情報の取得効果を上げたいと考えました。

③防災の認識向上と意識継続につながるか

もしもの不安を取り除く情報を提供し、防災に対して前向きに考え取り組める企画がよいと考えます。また、意識の継続については、今後も防災企画を続けていくことに意味があると捉えています。

参加者一組ごとに、たくさんある災害の中から身近で理解しやすい火災を想定し、建物から安全に逃げるためのレクチャーをスライドや紙芝居を利用し行い、参加者にはクイズ形



A分科会の様子

式で、○×の札を持ってもらい回答していただきました。その後、実際に建物内を歩き、どこにどんな防災設備が設置されているかを確認する、といったイベントの報告でした。

報告後は、身近な活動ということもあり興味を持った方が多く、有意義な意見交換ができました。また、参加者からは「自分の県に持ち帰り活動してみたい」という意見などがありました。

後半は、活動報告していただいたイベントで利用した建築物の間取図をお借りし、任意に火元を決め、避難口誘導灯と通路誘導灯を配置しながら避難経路を作図するワークショップを行いました。避難する立場で配置した誘導灯の位置や数は、実際の誘導灯の位置や数とは随分と異なった配置となりました。

私たち建築士は、建物の防災計画を日常業務の一つとして行っています。建物内に設置されている防災設備はたくさんあります。法律で定められている範囲内の設備を設置しがちですが、避難者の立場になることの重要性を改めて気づかされた分科会となりました。

B 分科会 参加者…12名

地産地消のすまい

司会…小林淑子(宮城県建築士会)

コメンテーター…酒井美代子
 (福島県建築士会)
 高橋直子(宮城県建築士会)

酒井美代子さんによる2017年2月から始まったばかりの地松プロジェクトの紹介では、地松とは、国産の松ということから①地松の特徴は? ②地松の生息域～福島は地松の宝庫～、③山が抱える問題点、理由。それを解決する方法、利点、④プロジェクトのきっかけ、⑤プロジェクトの概要、の報告です。

割れから発生する「音」のクレームには、不安を取り除くための「パキッとグー(good)」の

キャッチフレーズ。無駄なく、大切に使うため、木っ端と言わず「家のかげら」として木工クラフトのワークショップなどで利用。今年度は15棟分を準備し、6月着工の現場から利用開始、

ということでした。参加者からは、木材の乾燥温度、チーム(製材所・伐採業者、地主・管理者・設計事務所等)の重要性、施主へのアピール方法等の質疑や情報交換がありました。

山が抱える問題点・理由		解決方法・利点
<p>■需要が減った</p> <p>曲がり、反り、割れなどがクレームの対象になるなどの理由から、集成材を利用するメーカーや工務店が増えたから</p>		<p>■需要を増やす</p> <p>無垢材の良さを伝え、共感してくれる人を増やす</p>
<p>■無垢材の悪いイメージ</p> <p>高温乾燥による曲がり、反り、割れから発生する「音」がクレームの原因にもなっている</p>		<p>■低温乾燥することにより、曲がり、反り、割れを防ぐ</p> <p>松脂や香りも残り、美しい色艶に仕上がる。割れる音ができることでより強度が増すことも伝える</p>
<p>■技術がいなくなった</p> <p>集成材用かチップ用に伐採する今の山は、枝打ちをしない、ただ木を伐採するだけの単純作業になり、職人としての魅力も減った</p>		<p>■地松を利用する</p> <p>木材としての価値が高まると、枝打ちも定期的に行い、伐採時も技術が要求され、丁寧に木を扱って伐採するようになる。技量が発揮できる場になり、技術が伝承される</p>
<p>■歩留まり率が悪い</p> <p>角材をカットしたまわりの辺材は、チップになっている</p>		<p>■端材も無駄なく利用する</p> <p>間柱、階段材、框、などに利用することで、歩留まり率を高くする</p> <p>「家のかげら」として、木工クラフト、家具、ワークショップなどでも利用する</p>

地松プロジェクトの概要

高橋直子さんによる「地消」としての提案、自然の力を利用した小規模下水処理技術、土壌浄化法の紹介では、①下水設備が壊滅した大槌町での汚水処理方法としての出会いから、②興味深い下水処理システムを知る、③下水処理場は迷惑施設！④土壌浄化法とは？⑤日本の事例、⑥海外の事例、⑦なぜ普及しないのか？の報告です。

土壌生物がたくさん生息する土壌圏を利用して汚水処理をする技術なので、一般的な下水処理場と違い、沈殿処理槽・接触酸化槽・沈殿接触濾過槽、すべてが土壌被覆型。そのため臭気等はなく、処理場の上部は公園

等として活用。国交省や農水省の補助事業により全国に約70カ所あり、ブータンや韓国にも設置。既存下水道の人口減による破たんや改修、災害時など、この方法の可能性はある、ということでした。

参加者から洗剤の使用や設置後の問題点、等の質疑が出ましたが、洗剤は特に問題がないこと、設置後のトラブルは今のところないが、設置の際、粘土は難しいので土の分析が必要とのことでした。最後に、親子参加していた中学生の娘さんたちの感想は、「処理場の緑の上で運動やお祭りができるのは楽しそうでもよい」でした。

森林・端材の活用・地域の中での循環等、参加者の関心に十分に答えられなかったかもしれませんが、たくさんのヒントは持ち帰ってもらえた分科会になったと思います。



B分科会の様子

C分科会 参加者…37名

歴史的建造物と建物再生

司会…筒井裕子(愛知建築士会)

アシスタント…江上一枝(愛知建築士会)

コメンテーター…中浦豊子(三重県建築士会)

ヘリテージマネージャーが養成され、「歴史的建造物の保存・再生・活用」の活動が全国的に広がりつつあるが、活動が進むにつれさまざまな課題も聞かれるようになった。そこで三重県での取り組みを通して、それらの課題について参加者と意見交換し考えることとした。

三重県亀山市・鈴鹿市で、ヘリテージマネージャー養成講座の修了生が集まり発足したNPO法人亀山文化資産研究会の活動を発表していただいた。

調査活動としては、重要伝統的建造物群保存地区の関宿で、特定以外の建物等の分類調査や細部意匠調査等を行っており、取り壊される歴史的建造物の調査や記録保存にも積極的に取り組んでいる。

近年は文化財の魅力を伝えようと、登録文化財で現役の白川小学校の耐震補強工事



C分科会の様子



白川小学校での公開講座

現場の見学や改修活用事例の話を書くという公開講座を3年にわたり開催。また、亀山市より提案を受けて文化財公開活用モデル事業として「お城で七五三の写真を撮ろう」を開催。建物を使うことで文化財を知ってもらい、訪れてもらうというものである。事業は3年開催され、次回から着付けグループにバトンを渡すとのことである。そのほかに、町家保存修理工事現場の見学会も開催。所有者に思いを語ってもらい、地域住民に歴史的建造物への理解を深めてもらおうと活動している。地域に密着した地道な取り組みをご紹介いただいた。

後半は、6グループに分かれ意見交換を行った。題材は、①歴史的建造物の保存・再生・活用に取り組んでいる中での悩みや課題、②所有者に建物の価値をわかってもらい登録文化財の申請を促すにはどうしたらよいか等である。

①の活動の悩みとしては、ひと、時間、資金等の継続できる活動環境が整っていない。また、所有者が建物を保存・再生・活用するときの公的支援が薄いことが挙げられた。②



では、建物の価値に気づいていない所有者が多い。古い建物内部には家財道具等ものが溢れている場合が多く、いらぬものを片付け、本来のあるべき姿に戻して写真を撮り、所有者に見てもらい、建物の価値に気づいてもらうという活動が参加者から紹介された。訪問するたびに建物には価値があることを粘り強く語っていくことが必要不可欠であることも挙げられた。

1996(平成8)年に文化財登録制度が導入されて以来、登録有形文化財建造物は年々増えている。しかし、この制度を利用して歴史的建造物を継続的に保全活用していくとき、現状の優遇措置だけでは現実的に難しく、何らかの公的支援が必要とされているが、その支援も見込めない市町村がほとんどである。地域の建築士としては今後も粘り強く地道な活動が不可欠であるが、ファンドも含めいかに公費に頼ることなく事業として自立させるのか、その仕組みが求められていると感じる分科会となった。

D分科会 参加者…22名

環境共生住宅

司会…満原早苗(佐賀県建築士会)

アシスタント…藤田ゆかり(福岡県建築士会)

コメンテーター…内田恭代(宮崎県建築士会)

嗚呼六帖プロジェクト

——六帖軒：日本の伝統工法を支える家

25年前にアパート引っ越しをした翌日から体に不調が生じ、さらに2年後に引っ越した新築物件での生活により息子さんは余命宣告を受けるほど深刻な症状に。そのことをきっかけに20年前から建築を学び始めた内田さんは、珪藻土や無垢板などの身近な素材と食べ物による乾燥や腐敗の実験を繰り返しながら、シックハウス症候群と内装建材の関係性の研究を探ってきた。



D分科会の様子

実験例では、F☆☆☆☆のフローリング材とビニルクロス、無垢杉板と漆喰入り珪藻土を入れた密閉容器に食パンを入れた腐敗比較実験の様子が紹介され、シックハウス症候群が起きないとされる内装建材と自然素材の作り出す空気環境の違いを見ることができた。他の実験でも同様の結果が得られたことから、やはり自然素材に囲まれた環境のほうが食べ物にとってよい結果をもたらし、人間にとっても同じことが言えるはずだという確信となり、伝統工法と自然素材による家づくりの実践へとつながっていった。

実際に内田さんが生活をする「六帖軒」は、文字通り六帖(9.72㎡)の家。これは、シンプルで自由に生きる「スモールハウス」の考え方に基づいたものでもあり、また、今後の法改正と伝統工法、技術者の不足等、建築現場における問題を解決するべく場にしたいという思いから行きついた広さでもある。

建築基準法の一部が適用外となり、また規模が小さいことで、若い職人さんへ伝統工法の技術を継承する場として取り組みやすいという点。さらに、スペースがないので不要なものを買わない。銭湯に行くので掃除などの家事負担が楽、という女性らしい観点からも、このようなスモールハウスの推進をされている。

法や常識にとらわれないくらし方の実践を紹介していただき、建築とひとの生き方の関係性の深さを改めて考えさせられた。



六帖軒

後半は、六帖軒プロジェクトの内容をもとに、①ライフスタイルについて、②シックハウス症候群について、③素材・工法について(法律含む)、④工期・費用について、⑤その他、と大きく5つに分類して整理しながら意見交換を行った。

自然素材を用いた工法や、省エネ法改正については関心も高く、経験者や行政関係者によるアドバイスも聞かれた。また、伝統工法を残すための会があることについての情報や、行政を交えた各地での伝統工法についての取り組みの紹介など、参加者相互のコミュニケーションもやわらかく展開されていった。

環境共生住宅というテーマはなにかしら大きく捉えてしまいがちだが、自分の体と、その周りにある素材と、それにより構成された6帖の小さな住まいで、すべてを自分事として取り組み、日々発信を続ける内田さんの姿に大きな刺激を受けた分科会の時間であった。

E分科会 参加者…28名

自治体連携とまちづくり

司会…山中路代(富山県建築士会)

アシスタント…酒井朋子(富山県建築士会)

コメンテーター…徳田義弘、中井美幸、
山中路代(富山県建築士会)

富山県建築士会は、平成28年9月に氷見市と「まちづくり支援に関する協定」を締結しました。建築士会が自治体とまちづくり全般における協定を締結するのは初めてのこと。

活動のきっかけは、約3年前に高校の体育館を氷見市庁舎にコンバージョンした見学会に参加した際、「氷見市まちづくりバンク」

が整備されることを知り、バンクを活用することがまちづくりにつながるの思いから。氷見セッション、トイレ改修におけるアドバイス、美しい屋根並みの景観パネル展示などの活動を行い、今まで面識のなかった行政の人たちと信頼関係を築き協定につながっています。

協定締結後の主な3つの取り組みは、次のようなものです

①まちなか活性化の提案づくりで、実際に氷見の空き家の分布図を見てみんなでまちを歩き、その後、意見交換を行い、ケーススタディの候補地を決定。ワークショップにより、空き家や空き地の活用の可能性の5つのアイデアを出しあい、これらのアイデアのいくつかは今年度の取り組みにつながっています。

②リノベーションした土蔵改修工事は、築95年で、以前は米蔵として使用されていました。まちづくり支援の協定を結んだことによ

て建築士会に依頼があり、土蔵改修の支援を行うことになりました。

現地調査、耐震補強の考え方、設計、工事費の配分、施工、左官と塗装のワークショップ、写真記録など、これらをすべて建築士会の仲間で行いました。建築士会はさまざまな職能の集まりなので、「建築士会」の特徴を十分に活かすことができたと思います。竣工後は、氷見市に引き渡され、現在は「土蔵



リノベーションした土蔵



E 分科会の様子

を活用しながら保存する」ことを目的に利用者者を募集しています。

③ひみ里山杉の活用は、建築士会活動の一環で「ひみ里山杉」の勉強会の開催や、里山に入り「ひみ里山杉」の特徴を理解し、実際に業務の中で活用している取り組みです。建築士会員一人ひとりが、地元の県産材を積極的に活用して盛り上げていくことも大切なことだと思います。

報告後、グループごとに2つのテーマにつ

いて意見交換を行いました。

テーマ1…(まちづくり支援の協定により)建築士会と自治体が連携すると、どんな可能性がありますか?

「市民と行政の橋渡しができる」「参加しやすくなる」「景観に配慮したまちづくりが進められる」「まちづくりに長く関わることで信頼感を得て士会の認知度が上がる」など、意見が出ました。自治体の長期的なビジョンを見据えた上で、各士会員の専門性を活かしながらまちづくりに関われるのではないかと思います。

テーマ2…空き家を有効に活用するためのアイデアを!

「戸建ての場合は、シェアハウス、オフィス、たまり場、会議の場、カフェ、ゲストハウス」「公共の場合は、地域の観光の場、共用スペース」「集合住宅の空き家の場合は、塾としての活用、ミニ公民館としての活用」などのアイデアができました。さらに、空き家を子どもの遊び場として無償で提供しているシステムとなっている事例(尾道)や大きな視点では、流通体制を再度見直すことが必要ではないかとの意見ができました。

最後に、いろいろな地域で建築士会が自治体と協定を結び、市全体を捉えたまちづくり活動に参加することで輪が広がり、士会活動が活性化することを願います。

F 分科会 参加者…25名

子どもと住環境

司会…新海直美(北海道建築士会)

アシスタント…岩崎美乃(北海道建築士会)

コメンテーター…小西 恵(東京建築士会)、
眞田井良子(愛媛県建築士会)

住環境は生活の基盤となる大切な要素であり、私たち建築士はその重要性を目の当たりにする機会も多くありますが、近年子どもを取り巻く話題として、住環境について触れられる機会はそう多くはありません。この分科会では、子どもに焦点をあてた活動をしている2つの事例を報告していただきました。

「都内保育園の既存改修アイデアと屋上園庭活用の報告」(東京建築士会)

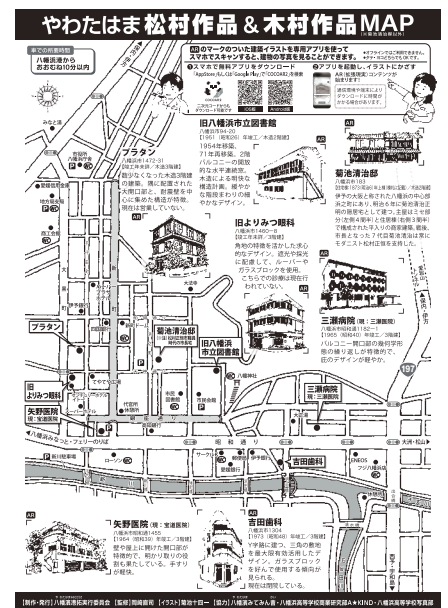
活動のきっかけは、全国的にも話題となった保育園の用地問題をどうやったら解決できるだろうか、という建築士同士の雑談からでした。そこから、待機児童問題の緊急対策が求められている中、既存の保育園を改修することで定員を増やせないかと改修案をまとめ、行政・保育士・保護者を巻き込んだクロストークを実施。さまざまな立場からの思いを建築士がまとめ形にしていくという試みは、多くの課題解決の糸口がみつかる結果となり、メディアにも取り上げられ大きな反響を呼びました。

クロストークを期に、活動を続けていくにあたり「一般社団法人園Power」を設立。屋上園庭を積極的に活かすための実態調査と研

究等、子どもの成育環境に関する空間の提案やプロデュースを続けており、その経過も報告いただくことができました。

「こども・けんちく学校」(愛媛県建築士会)

愛媛県建築士会女性委員会では身近な存在の建築やそれを取り巻く環境に関して、楽しくわかりやすく学ぶ機会を設けたいと、子どもたちを対象にした「こども・けんちく学校」を継続して開催しています。海岸に流れ着いた漂流物と地元名産のかまぼこの板を使ったミニチュアの模型づくり、木の棒と合板を使った秘密基地づくり、地域の建物のことを学び「こどもガイド」として実際に案内する研修会、地元で活躍した建築家の建物のMAP制作、8万枚のかまぼこ板で椅子のデザインをする、街をつくる等、多くの学びの場を提供し続け



建築作品 MAP

ている様子を報告いただきました。

この活動からは100名以上の八幡浜観光大使が生まれているとのこと。子どもたちがただ受け取るのではなく、学び、考え、自ら実行までしていくという流れが継続されていること、地域からの多くの協力が得られている様子にも学ぶところが多くありました。

その後の意見交換では、両事例が現在に至るまでの経過も伺うことができました。どちらも一朝一夕に形となったわけではなく、それまでに少しずつ積み重ねられた活動があったことや、そのネットワークが活かされていたという貴重なお話しも伺うことができました。また、他の地域からもパスタブリッジやお菓子の家づくり、紙ぶるるやちびっこ木工、高校生住教育講座など多くの活動の報告がなされました。

クロストーク
緊急改修
アイデア
待機児童解消につながるヒント

既存保育所を
バリエーションアップ

親子保育所を建設するだけでなく、待機児童問題の解決策は? 既存保育所の既存スペースを有効活用することで、保育の質をあげつつ、児童の定数も増やすことが可能。新たな施設建設への反対の声が克服するが、建築士ならではの視点で解いたアイデアを提案し、保護に関わる職種と共に、その実現性について各ディスカッションできればと思います。

平成28年 8月20日(土)
13:30~16:30 (13:00開場)

プログラム(予定)
①報告 杉並区保育施設改修計画
②発表 北区東田保育園改修の取り組み
③説明 高円寺保育園、今川園の改修
④グループディスカッション ほか

お申込みは下記まで
お問い合わせ先: yasuraoka@tokyokenchikushi.or.jp
共同主催: 杉並区議会、東京建築士会女性委員会
http://www.tokyokenchikushi.or.jp/event/20160820.pdf

クロストークパンフレット

G分科会 参加者…39名

高齢社会と住まい

司会…石貫方子(大阪府建築士会)

アシスタント…田代加奈(大阪府建築士会)

コメンテーター…曾我部千鶴美
(大阪府建築士会)、
山本和代
(兵庫県建築士会)

高齢化が急速に進行する現在、在宅介護や認知症などの問題が身近にも増えつつある。2つの高齢者に関する10年以上にわたる地道な活動事例をもとに、建築士の高齢社会への関与・役割について考え、今後の私たちの活動のあり方について情報・意見交換を行った。

新版「安心・安全・安らぎの家」普及活動

大阪府建築士会では、2000年に「安心・安全・安らぎの家」と題し、高齢化と住まいへの配慮を題材に建築士からのメッセージとしての小冊子を作成し、その後何度か改訂を重ね、2016年には大改訂を行って新版を完成させ、この小冊子を使用した市民向けの無料セミナーなどを行ってきた。この普及活動について、予算がない中での冊子の作成や課題について報告があった。

ユニバーサルデザイン研究会の活動経緯と今後の活動

兵庫県建築士会のユニバーサルデザイン研究会は2003年設立で、高齢者に限らず障



認知症セミナーの開催(ユニバーサルデザイン研究会)

がい者や妊婦、子ども、日本語がわからない人などの多様な人を対象に、建築空間や公共交通空間にある問題の掘り起こし作業等を行ってきた中で、行政との連携によるセミナーや勉強会の開催、まちや公共建築のUDチェック&アドバイス活動にも参加している。昨年にはこれらの活動の積み重ねが評価され、兵庫県の「人間サイズのまちづくり賞 ユニバーサルデザイン部門」を受賞した。また、最近では認知症の勉強会を始めており、建築への応用を考える上でノウハウではなくヒントが必要、個別解が求められる、特性を理解して考えていく等、建築士としての空間整備の技術が必要であるとのことだった。発表の中で紹介された外山義氏の言葉「認知症高齢者は環境のカナリア」という言葉が

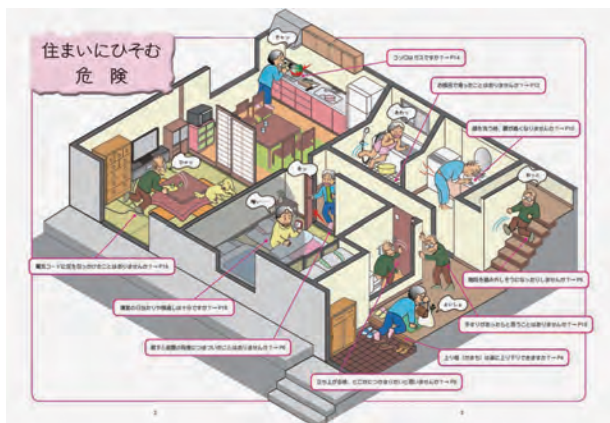
心に残った。

参加者からの意見や情報

- ①士会での活動事例…行政との連携により助成金を受けたり、セミナーや相談会などの活動を行っているという声が多く聞かれた。また、医療関係やケアマネージャーとの連携に勉強会やセミナーなどを行っているという意見もあった。建築士も継続して、1人の知識にとどめずに、建築士の仲間や異業種から学ぶことで知識を広げることが重要であると感じた。
- ②仕事での取り組み事例…高齢者の住まいの仕事においては、正解がなく終わりが無い難しさを感じた。バリアフリーの手すり設置などの対応は身体が元気なうちからやったほうがいいのか、付けないほうが長く元気でいられるのか、といったような悩ましい問題がある。施主の中には、自分で手すりを設置して助成金を申請するものの、ボードにビス止めて外れるような事故も報告された。住まいは、若い人も高齢者もコンパクトなほうが住みやすいという意見もあった。いずれにしても正しい知識が必要だと感じた。
- ③その他、気を付けていること困っていること…活動資金不足に関しては、クラウドファンディングの活用や、他の士会の協力などの情報があった。認知症に関しては、さまざまな情報、課題が出され、仕事上ではまだまだ事例や情報が少ないため、建築士会でも共有していくことが重要であると感じた。



新版「安心・安全・安らぎの家」



H分科会 参加者…50名

既存ストックの活用

司会…多羅尾直子(東京建築士会)

コメンテーター…川並順子、佐藤由紀子
(東京建築士会)

東京の既存ストックの活用例

日本人の10人に1人が住む東京。急激な発展をしてきた東京も、これから人口減と家余りの時代を迎える。こうした状況を踏まえて東京建築士会女性委員会は2つのシンポジウム「住み継ぎの作法」(2014)、「東京 edo をひらく」(2016)を開催した。その中で発表された東京のストック活用事例の2つを紹介していただいた。

一つは、スケルトンに戻して抜本的な改修を行い、セルフビルド的手法の実践と柔軟な発想で空間を蘇らせた、佐々木珠穂さん(A+Sa)設計の「御茶ノ水のリノベーション」と「野毛の家のリノベーション」。前者は都心部の築40年のペンシルビルを住宅に改修したもの。役所と相談しながら、確認申請が不要な範囲で耐震補強を伴う改修を行っている。

後者は事業者が中古の木造住宅を買って、改修をして消費者に転売するという買い取り再販の事例である。私鉄沿線の住宅地が衰退しないように、若い人向けの住まいを増やしていこうという、鉄道会社に関わる事業である。耐震化、断熱化、サッシや設備の更新を行い、元々あったスキップフロアの構成を活かし、つくりこまない手法で、高性能で可変性の高い、魅力的な住まいを実現している。

もう一つは、東京・谷中で、築60年の木質アパート「萩荘」を改修して、最小の文化複合施設「HAGISO」として甦らせ運営している宮崎晃吉さんの活動。HAGISOには、ギャラリー、カフェ、レンタルルームなどが設けられ、それらのスペースではいろいろなイベントがなされて、劇場、映画館、図書館などに日々姿を変えている。イベントによって仲間ができて、共感が広がる。

HAGISO始動から3年後、谷中の価値の本質を伝えようと、まちをまるごとホテルにみたてたダイアグラムを構想。築50年の木質

アパートを改修し、宿泊施設「HANARE」を始める。HAGISOにホテルのフロントを置き、朝食も同カフェで、銭湯まで歩いたり、まちの人と挨拶したりする。これらはお客さんにとっては負荷ではあるが、設計とデザインの演出により、ここだけの体験に変換させている。まちの当たり前のことに価値を見出し、かけがえないものへと変換させている。

群馬県、徳島県、香川県、大分県、栃木県、和歌山県の参加者から、「中心部のシャッター商店街で、空き店舗を改修した新たな店ができる」と、連鎖反応を呼んでそういった店が少しずつ増え、活気ももどってきた。「SNSで情報発信することで、山の中の古民家を改修したホテルに海外からも多くの宿泊客が来る」「古民家改修で、そのまちに暮らしているよう

な体験ができるホテルが各地にできている」といった事例が報告された。

各地でまちおこしや経済に関わる既存ストック活用が徐々に広がり、地域の価値を高めることにつながっている。自然景観や産業遺産やまちなみといった地域のストックを観光資源としていくのに、建築のストック活用が結びつくと相乗効果を生む。古民家など歴史的価値のある建物だけでなく、ごく普通の建物のリノベーションにも興味深い事例が見られる。建替えより改修したほうが安いという経済的メリットもあるだろう。ビジネスとしての仕組み、持続可能な取り組み、共感する施主と仲間が必要である。情報交換を継続していきたい。



「野毛の家」のリノベーション内観(撮影…吉田香代子)



「HAGISO」外観(撮影…吉田香代子)